

キヤノン財団 研究助成プログラム  
「理想の追求」「産業基盤の創生」  
総括報告書

# 目次

はじめに	3
<b>I. 「理想の追求」プログラム総括</b>	<b>4</b>
1. プログラム概要	
2. 応募・採択件数、採択率、助成金額	
3. 採択実績	
1) 採択件一覧	
2) 年齢（採択時）	
3) 採択者の所属機関（採択時）	
4. 助成終了後の発展	
1) 学術誌掲載実績	
2) 採択後の競争的資金獲得状況	
3) 異分野融合的研究	
4) 国や地域の施策に貢献	
<b>II. 「産業基盤の創生」プログラム総括</b>	<b>12</b>
1. プログラム概要	
2. 応募・採択件数、採択率、助成金額	
3. 採択実績	
1) 技術分野	
2) 年齢（採択時）	
3) 採択者の所属機関（採択時）	
4. 助成終了後の発展	
1) 学術誌掲載実績	
2) 採択後の競争的資金獲得状況	
3) 異分野融合的研究	
4) 産業化へ進展	
<b>III. 腸内細菌ワークショップ</b>	<b>19</b>
<b>IV. 選考委員長講評</b>	<b>20</b>
あしがき	22

注意：本報告書に記載されている研究者の所属・職位は採択当時の情報です。（一部、変更連絡のあった場合のみ、情報を更新しています。）

## はじめに

キヤノン財団は、科学技術をはじめとする幅広い学術および文化の領域の研究、事業、教育等に対して助成・支援を行い、学術および文化の振興発展をもって広く国民生活の向上と人類社会の繁栄に貢献することを目的として、2008年12月1日にキヤノン株式会社により設立されました。

上記の設立趣旨のもと、科学技術分野への研究助成プログラムを実施し、14年間で、207件の研究助成を行ってきました。(2022年12月現在)

社会や自然環境が激しく変化する不確実な世界を迎えている今日、新しい価値を創出し、より豊かな社会を実現する科学技術イノベーションへの期待は益々高まっています。新しい知の創造を担うことを期待されている研究者には自由な発想で社会の将来像を構想し、新しい世界を切り拓くことが求められています。旧来の枠を超えた新しい課題に挑戦する研究や大きな夢のある研究、未来に向けて新しい価値を創造する革新的な研究が本助成により発展していくことを期待し、研究助成という形で支援を行ってまいりました。

当財団の研究助成は、本助成を足掛かりとして、その後大きく多種多様な発展につながる事を期待して、萌芽的、先駆的、革新的な研究に支援をしてまいりました。また、すでに評価された研究課題にとらわれず、既存の学術領域を超えるような研究に果敢に挑戦する若い研究者を多く発掘し、その発展をサポートしてまいりました。

2022年3月に、第一期の二つの研究助成プログラムの最終となる第10回助成研究の最終成果報告が行われ、両プログラムが終了いたしました。これにあたり、助成研究のその後の発展についてアンケート調査を行い、本書にて報告としてまとめました。

2020年4月からは第二期となる新しい研究助成プログラムがスタートしています。第一期で培った「萌芽的、先駆的、革新的」の精神はそのままに、これからの人類が向かうべき理想の社会への構想を描く研究者を支援していきます。

今後もキヤノン財団へのご理解・ご支援をよろしくお願いいたします。

### 研究助成プログラム

#### 第一期：第1回～第10回

(助成研究開始年：2010年～2019年)

- 「理想の追求」プログラム
- 「産業基盤の創生」プログラム

#### 第二期：第11回～

(助成研究開始年：2020年～)

- 「善き未来をひらく科学技術」プログラム
- 「新産業を生む科学技術」プログラム

# I. 「理想の追求」プログラム総括

## 1. プログラム概要

人類の英知を深め、人類の永遠の繁栄に貢献する研究を支援する助成プログラムである。Frontier、Welfare、Sustainabilityの視点から財団が設定した課題に対し、科学技術を核として、分野を越えて総合的に取組む研究プロジェクトを対象として助成する。

### ■ 対象分野

#### 第1回～第5回 海の研究

Frontier, Welfare, Sustainabilityの視点で自然科学分野における知識の創造、知識を蓄積可能なテーマを探索し、食料問題、環境問題、資源問題など多く課題が「海」に関係したものであったこと、また人類の海洋に関する知識がそれほど深くなく、まだ未知な領域であったことから、『海』を課題に設定した。

#### 1～2回 課題

- 海に暮す生き物の不思議、未知の生態
- 地球の歴史、生命の起源に迫る海洋研究
- 地球規模の気候変動と海の変化
- 海洋環境の観測と回復
- 海の恵みがもたらすイノベーション

#### 3～5回 課題

- 生命を育む神秘なる海の研究
- 資源の宝庫である海の研究
- 環境の変化をもたらす海の研究
- その他の海の研究

#### 第6回～第10回 食に関する研究

『食』は人間の最も根源的な営みであり、『食』に関する研究はいろいろな観点から、今見直されるべき時に来ている。特に以下に挙げた5つの課題について、従来比較的小規模で行われていた個別研究ではなく、大きな視点に立った分野融合的で、かつ有意義なゴールを設定した研究を支援する目的で『食』を課題に設定した。

#### 課題

- 飢餓と飽食
- 食の安全保障
- 第6次産業化
- 食の文化と健康、美味しさ
- 食の安全性と流通

### ■ 応募条件

- 国内の大学および大学院（附属機関を含む）、大学共同利用機関、高等専門学校、その他公的研究機関等に勤務し、当該機関で実質的に研究できる研究者。
- 助成期間中に日本国内に居住していること、国籍は問わない。

## ■ 助成期間

3年間

## ■ 助成金額

1～6回： 1件あたり上限5,000万円、年間約2件を採択

7～10回： 1件あたり上限3,000万円、年間約3件を採択

## ■ 選考方法

選考委員による一次選考（書類審査）、および二次選考（面接）

## ■ 選考基準

選考にあたり下記項目が考慮される。

- 挑戦性： 本質的な課題を提案し、大きな目標が設定されている
- 独創性： 独自の解決方法を提案しており、ブレークスルーが期待できる
- 先駆性： すでに実施されている研究プロジェクトではなく、新規な研究プロジェクトである
- 貢献性： 学術あるいは社会に対し研究成果の大きな貢献が期待できる
- 研究体制： 研究目標を達成するため分野を越えて必要な人材を集めたプロジェクトの構成となっている
- 計画性： 限られた期間と予算の下に目標の達成が可能な実施計画である

## 2. 応募・採択件数、採択率、助成金額

### 第1回～第5回 海の研究

第1回～第5回の総計で、応募数は367件、採択数18件、採択率は4.9%である。

助成金額は合計5億円である。

	第1回 2010年	第2回 2010年	第3回 2010年	第4回 2010年	第5回 2010年	総計
応募件数(件)	76	87	62	65	77	367
採択件数(件)	3	4	4	3	4	18
採用率(%)	3.9%	4.6%	6.5%	4.6%	5.2%	4.9%
助成金額(万円)	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	50,000

### 第6回～第10回 食の研究

第6回～第10回の総計で、応募数は616件、採択数18件、採択率は2.9%である。

助成金額は合計4億1,700万円である。

	第6回 2015年	第7回 2016年	第8回 2017年	第9回 2018年	第10回 2019年	総計
応募件数(件)	128	128	159	159	99	616
採択件数(件)	3	4	3	4	4	18
採択率(%)	2.3%	3.1%	1.9%	3.9%	4.0%	2.9%
助成金額(万円)	7,500	8,200	8,000	9,000	9,000	41,700

### 3. 採択実績

#### 1) 採択件一覧

採択者と採択テーマを下記に示す。詳細は付録「採択テーマ一覧」に記す。

#### 海の研究

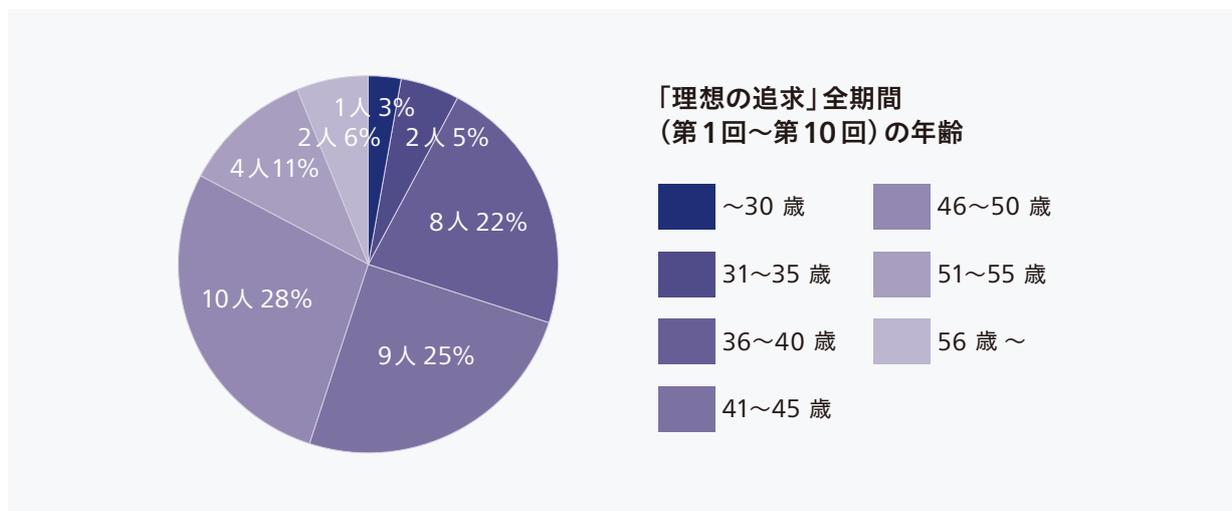
カテゴリー	氏名	所属	採択回	採択テーマ
資源・エネルギー	落合 芳博	東北大学	3	深海魚類資源の網羅的開拓
	高井 研	海洋研究開発機構	3	沖縄の深海に超巨大海底熱水鉱床を探せ
地球環境改善	桑江 朝比呂	港湾空港技術研究所	3	都市型ブルーカーボン:新たな沿岸海域炭素循環像の構築
生物多様性、進化	北野 宏明	システム・バイオロジー研究機構	1	サンゴ-共生藻におけるロバストネス・トレードオフと気候変動
	桑田 晃	水産資源研究センター	2	未知の藻類:パルマ藻が解き明かす海洋を支える珪藻の進化
	杉松 治美	東京大学	2	アジア域に棲息する小型歯クジラ類のリアルタイム音響観測ネットワークの構築
	御手洗 哲司	沖縄科学技術大学院大学	2	深海底熱水噴出域の幼生輸送と生物群集変動
	井上 麻夕里	岡山大学	4	環境を記録する造礁サンゴの骨格成長メカニズムの解明
	岩崎 渉	東京大学	4	太古、生命はどんな光を見たか
	荒木 仁志	北海道大学	5	北の海に未知なる生命と生物多様性を探る
	西田 洋巳	東洋大学	5	海洋を漂うプラスミドDNAが生物進化に与える影響
気候、海流	吉田 天士	京都大学	5	ウイルスは海洋生物多様性を創生・維持する素粒子か?
	佐藤 克文	東京大学	1	動物目線による海洋環境モニタリング
	田村 岳史	国立極地研究所	4	気候変動の鍵を握る南極の海
	西岡 純	北海道大学	3	凍る海の豊かな生態系を生み出す機構の解明
文化、自然遺産	升本 順夫	東京大学	5	海洋4次元地図帳:モデリングと可視化のニューフロンティア
	岩淵 聡文	東京海洋大学	1	水中文化遺産研究への海洋工学の応用
	眞部 広紀	佐世保工業高等専門学校	2	陸海域カルスト水文系の追跡によるロボット探査とマッピング

## 食の研究

カテゴリー	氏名	所属	採択回	採択テーマ
飢餓と飽食	木下 奈都子	筑波大学	6	揮発性物質による植物間情報伝達と早期病害ストレス検出基盤構築
	辻 寛之	名古屋大学 兼 横浜市立大学	7	フロリゲンを活用して地球温暖化に強い作物を創るための基礎研究
	芦刈 基行	名古屋大学	7	食糧問題軽減を目指したイネの分子育種と特性評価
	小早川 高	関西医科大学	8	先天的恐怖活用技術の開発によるげっ歯類からの食害防止
	野田口 理孝	名古屋大学	9	接木技術革新による放棄土壌の再活用プロジェクト
	妹尾 啓史	東京大学	9	土を肥やす新たな微生物基盤の解明
食の安全保障	西條 雄介	奈良先端科学技術大学院大学	9	イネ種子微生物叢を介した種子形質及び微生物共生の制御基盤構築
	清水 達也	東京女子医科大学	10	藻類動物細胞共生リサイクル培養による革新的食料生産法の確立
第6次産業化	後藤 貴文	北海道大学	7	牛肉生産システムの大構造改革:科学と国土をフル活用した大革新
食の文化と健康、美味しさ	辻 典子	十文字学園女子大学	6	伝統発酵食品の腸管免疫制御および腸・脳に関する研究
	都築 毅	東北大学	6	伝統的日本食を基盤とした健康維持に有効な食事「日本食」の確立
	栗原 新	近畿大学	7	食品成分の腸内細菌変換による健康増進効果の遺伝学的解析
	植松 智	大阪公立大学 兼 東京大学	8	日本人と欧米人の腸内細菌叢比較とプロバイオティクス効果の解析
	加藤 清明	帯広畜産大学	8	食物アレルギーを幅広く軽減する米の研究
	國澤 純	医薬基盤・健康・栄養研究所	9	食と腸内細菌により形成される腸内環境の理解と健康科学への展開
	宮下 芳明	明治大学	10	健康な食事を化学物質なしで満足な美味しさに変える電気味覚技術
食の安全性と流通	経塚 淳子	東北大学	10	地下茎雑草の強みを逆手に取る画期的雑草防除法の開発
	伊藤 幸博	東北大学	10	薬に過度に依存しない畜産物の健全育成システムの開発

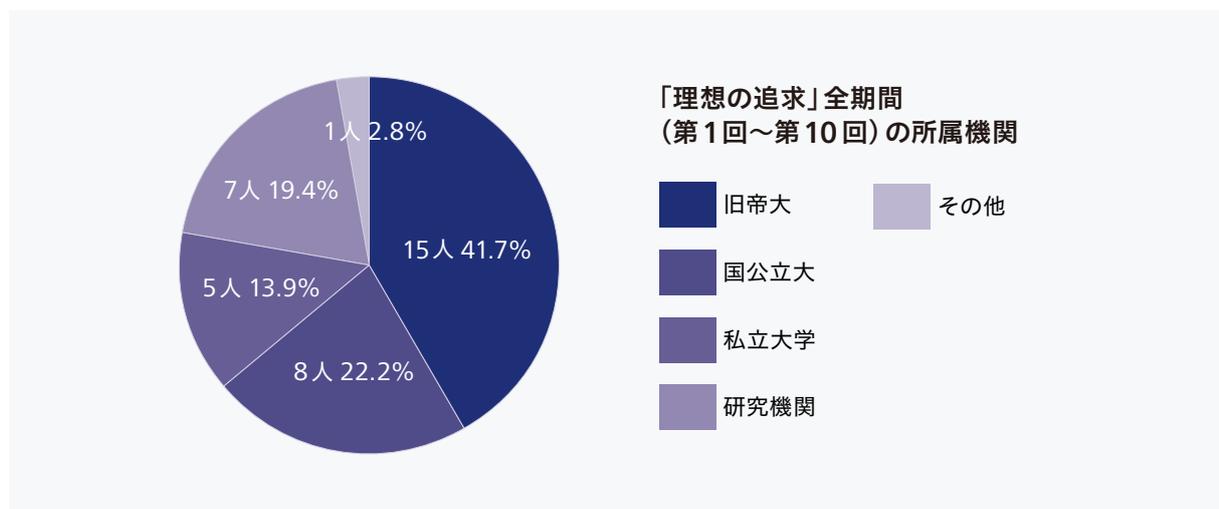
## 2) 年齢（採択時）

30歳台後半からから40歳代の研究者の比率が比較的高いが、幅広い年齢層から採択されている。



### 3) 採択者の所属機関（採択時）

採択者の所属機関は旧帝国大学が約 4 割、国公立大学、研究機関が各約 2 割、私立大学が約 1.5 割である。



### 4. 助成終了後の発展

採択された助成研究のその後の発展を確認するため、期間終了後の研究の状況に関して、研究代表者にアンケート調査を行った。

#### 調査方法

第1回～第10回の研究代表者36名に助成期間終了後の進展について以下のアンケートを実施。

- ① その後のあなたの研究の発展にどのような役立ちましたか？
- ② 新たな競争的資金の獲得に結び付きましたか？
- ③ 助成期間やその後の研究により生まれた特許、論文や出版物はありますか？
- ④ 社会貢献に結びついた成果がありましたか？

#### 調査期間

2022年3月1日～31日

#### 回答数

31名（36名中。回答率：86%）

#### 回答結果

##### 1) 学術誌掲載実績

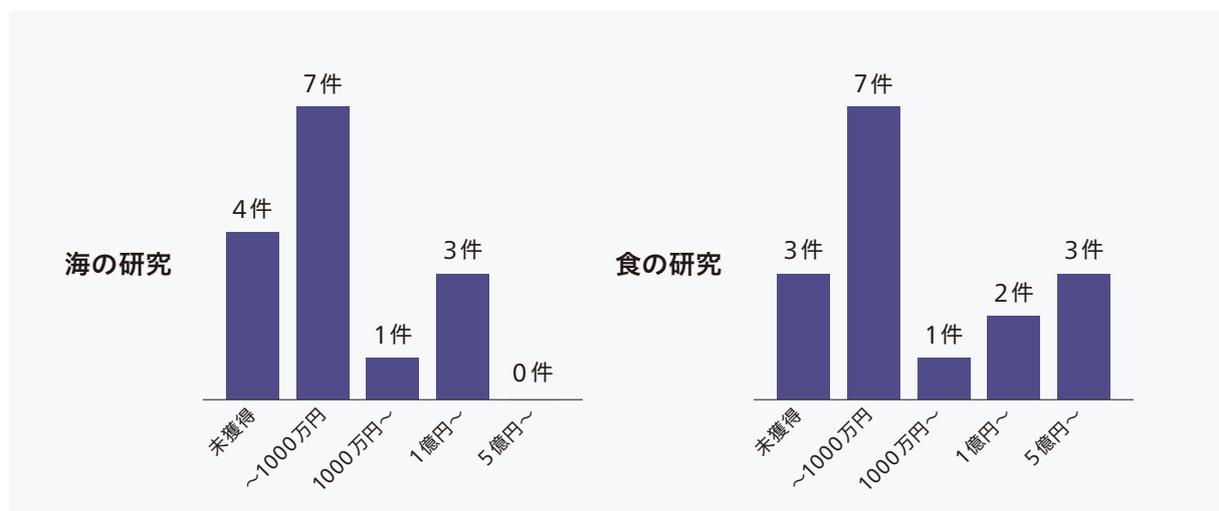
研究助成の成果は、世の中に学術的価値の高さが認められて権威ある学術誌に多く掲載されており、採択された研究が高い学術レベルにあったと言える。

代表的な例として Impact factor10 以上の雑誌への掲載を以下に記す。

雑誌名	所属氏名(採択回)	タイトル
Nature	名古屋大学 芦莉基行(7)	Antagonistic regulation of the gibberellic acid response during stem growth in rice (vol.584, pp.109-114 (2020))
Science	名古屋大学 野田口理孝(9)	Cell-cell adhesion in plant grafting is facilitated by $\beta$ -1,4-glucanases (vol.369, pp.698-702 (2020))
Gastroenterology	大阪公立大学/東京大学 植松智(8)	Functional Restoration of Bacteriomes and Viromes by Fecal Microbiota Transplantation (vol.160, pp.2089-2102.e12 (2021))
	大阪公立大学/東京大学 植松智(8)	Antigen-specific Mucosal Immunity Regulates Development of Intestinal Bacteria-mediated Diseases (vol.157, pp.1530-1543.e4 (2019))
Nature Biotechnology	京都大学 吉田天士(5)	Minimum information about an uncultivated virus genome (MIUViG) (vol.37, pp.29-37 (2019))
Cell Host & Microbe	大阪公立大学/東京大学 植松智(8)	Metagenome Data on Intestinal Phage-Bacteria Associations Aids the Development of Phage Therapy Against Pathobionts (vol.28, pp.380-389.e9 (2020))
Nature Communications	名古屋大学 兼 横浜市立大学 辻寛之(7)	DNA methylation is reconfigured at the onset of reproduction in rice shoot apical meristem (vol.11, Article ID 4079 (2020))
	関西医科大学 小早川高(8)	Large-scale forward genetics screening identifies Trpa1 as a chemosensor for predator odor-evoked innate fear behaviors (vol.9, Article No.2041 (2018))
	関西医科大学 小早川高(8)	Thiazoline-related innate fear stimuli orchestrate hypothermia and anti-hypoxia via sensory TRPA1 activation (vol.12, Article ID 2074 (2021))
	関西医科大学 小早川高(8)	Posterior subthalamic nucleus (PSTh) mediates innate fear-associated hypothermia in mice (vol.12, Article ID 2648 (2021))
The ISME Journal	京都大学 吉田天士(5)	Locality and diel cycling of viral production revealed by a 24 h time course cross-omics analysis in a coastal region of Japan (vol.12, pp.1287-1295 (2018))

## 2) 採択後の競争的資金獲得状況

回答者 31 名のうち 24 名（回答者中約 77%）の採択者が新たな競争的資金を獲得し、研究を進展させている。そのうち、8 名（回答者中約 26%）は 1 億円以上の大型プロジェクトに発展している。



代表的な例として1億円以上の競争的資金を獲得した件を以下に記す。

氏名	所属	採択回数	採択テーマ	獲得した競争的資金	
植松 智	大阪市立大学/ 東京大学	8	日本人と欧米人の腸内細菌叢比較とプロバイオティクス効果の解析	AMED 創薬事業部	9.0億円
國澤 純	医薬基盤・健康・栄養研究所	9	食と腸内細菌により形成される腸内環境の理解と健康科学への展開	科学研究費:PRISM 臨床研究等ICT基盤構築・人工知能実装研究事業	約6.8億円
清水 達也	東京女子医科大学	10	藻類動物細胞共生リサイクル培養による革新的食料生産法の確立	農林水産省ムーンショット 農林水産省戦略プロジェクト	5.7億円 1.0億円
妹尾 啓史	東京大学	9	土を肥やす新たな微生物基盤の解明	科学研究費:基盤研究(S) JST未来社会創造事業	約2.0億円 約1.6億円
小早川 高	関西医科大学	8	先天的恐怖活用技術の開発によるげっ歯類からの食害防止	AMED-CREST	2.6億円
西岡 純	北海道大学	3	凍る海の豊かな生態系を生み出す機構の解明	科学研究費:基盤研究(S)	約1.9億円
吉田 天士	京都大学	5	ウイルスは海洋生物多様性を創生・維持する素粒子か?	科学研究費:基盤研究(S)	約1.9億円
岩崎 渉	東京大学	4	太古、生命はどんな光を見たか	JST CREST	1.5億円

### 3) 異分野融合的研究

異分野融合的研究も多く生まれている。例を以下に挙げる。

氏名	所属	採択回数	採択テーマ	技術融合
北野 宏明	システム・バイオロジー研究機構	1	サンゴ-共生藻におけるロバストネス・トレードオフと気候変動	バイオ(サンゴ共生藻)と数理モデル解析(バイオインフォマティクス)
佐藤 克文	東京大学	1	動物目線による海洋環境モニタリング	動物の生態観察と地球環境(気流、海流、気候)計測
御手洗 哲司	沖縄科学技術大学院大学	2	深海底熱水噴出域の幼生輸送と生物群集変動	バイオ(幼生分析)と地球環境(深海底熱水領域)調査
井上 麻夕里	岡山大学	4	環境を記録する造礁サンゴの骨格成長メカニズムの解明	バイオ(サンゴ成長メカニズム)、材料分析と地球環境学(気候変動)
岩崎 渉	東京大学	4	太古、生命はどんな光を見たか	バイオ(遺伝子解析)と数理モデル解析(バイオインフォマティクス)
吉田 天士	京都大学	5	ウイルスは海洋生物多様性を創生・維持する素粒子か?	バイオ(ウイルス解析)と地球環境学(海洋影響)
木下奈都子	筑波大学	6	揮発性物質による植物間情報伝達と早期病害ストレス検出基盤構築	AI(機械学習)と有機材料(ストレスホルモン)
植松智	大阪公立大学/ 東京大学	8	日本人と欧米人の腸内細菌叢比較とプロバイオティクス効果の解析	バイオ(細菌、ウイルス遺伝子解析)と有機材料(免疫物質)
小早川高	関西医科大学	8	先天的恐怖活用技術の開発によるげっ歯類からの食害防止	バイオ(遺伝子解析)と有機材料(感覚刺激剤)
妹尾啓史	東京大学	9	土を肥やす新たな微生物基盤の解明	バイオ(細菌・植物、遺伝子解析)と農学
宮下芳明	明治大学	10	健康な食事を化学物質なしで満足な美味しさに変える電気味覚技術	AI(機械学習)とバイオ(味覚神経)

### 4) 国や地域の施策に貢献

回答者31名のうち22名(回答者中約71%)でなんらかの国や地域の施策に貢献へ向けた発展をしている。その内、9名(回答者中約29%)が地域と連携した取り組みを開始しており、10名(回答者中約32%)が国、地域の施策に貢献へと進展している。

国、地域の施策に貢献した例（10件）を下記に示す。

氏名	所属	採択回	採択テーマ	内容
岩淵 聡文	東京海洋大学	1	水中文化遺産研究への海洋工学の応用	国レベル： <ul style="list-style-type: none"> <li>ユネスコの水中文化遺産保護条約批准に関する議論で研究成果が参考資料となった。</li> </ul> 地域のレベル： <ul style="list-style-type: none"> <li>埋蔵文化財包蔵地に水中文化遺産を指定する検討会議に研究成果が貢献。</li> </ul>
佐藤 克文	東京大学	1	動物目線による海洋環境モニタリング	<ul style="list-style-type: none"> <li>小学校や中学校の国語教科書にバイオリギングに関して記した文章を掲載。</li> <li>若年層に向けたバイオリギングの知名度やその内容の浸透に貢献。</li> </ul>
御手洗 哲司	沖縄科学技術大学院大学	2	深海底熱水噴出域の幼生輸送と生物群集変動	<ul style="list-style-type: none"> <li>2019年より独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構（JOGMEC）の海底資源開発に関わる、環境影響評価グループの委員として活動。</li> </ul>
桑江 朝比呂	港湾空港技術研究所	3	都市型ブルーカーボン：新たな沿岸海域炭素循環像の構築	<ul style="list-style-type: none"> <li>浅海におけるCO2隔離・貯留とその活用の研究が環境省の施策に貢献。</li> </ul> 【関連書籍】 ・「ブルーカーボン：浅海におけるCO2隔離・貯留とその活用」 ・Blue Carbon in Shallow Coastal Ecosystems Springer Nature
田村 岳史	国立極地研究所	4	気候変動の鍵を握る南極の海	<ul style="list-style-type: none"> <li>気候変動に関する政府間パネル(IPCC)レポート等に成果を掲載。</li> <li>海水準予測精度の向上という点で社会に貢献。</li> </ul>
荒木 仁志	北海道大学	5	北の海に未知なる生命と生物多様性を探る	<ul style="list-style-type: none"> <li>市と共催で市民団体による親子講習会を開催</li> <li>知床世界自然遺産地域科学委員会・河川工作物アドバイザー会議において長期モニタリング手法として採択</li> </ul>
木下 奈都子	筑波大学	6	揮発性物質による植物間情報伝達と早期病害ストレス検出基盤構築	<ul style="list-style-type: none"> <li>外務省の日本ブランド発信事業として英国の王立キューガーデンとロザムステッド研究所、ブルキナファソの国立科学・技術振興センターで講演。</li> <li>ブルキナファソの中学校にて授業と分子生物学のワークショップを実施。</li> <li>農水省の植物防疫担当者と香りでウイルス感染植物を検知するプロジェクトを計画中。</li> </ul>
栗原 新	近畿大学	7	食品成分の腸内細菌変換による健康増進効果の遺伝学的解析	<ul style="list-style-type: none"> <li>食品成分による腸内細菌代謝物の人体への影響に関する研究を複数の食品企業と共同で、社会実装中。</li> <li>上記活動で競争的資金も獲得。</li> </ul>
植松 智	大阪公立大学/ 東京大学	8	日本人と欧米人の腸内細菌叢比較とプロバイオティクス効果の解析	<ul style="list-style-type: none"> <li>腸内細菌の薬剤耐性対策としてファージ療法を提言、社会実装プロジェクトとしてAMEDに採択。</li> </ul>
小早川 高	関西医科大学	8	先天的恐怖活用技術の開発によるげっ歯類からの食害防止	<ul style="list-style-type: none"> <li>感覚創薬(生物が進化の過程で獲得した保護能力を統合誘導する脳へ適切な感覚情報を送ることで内面的に治療する)として革新的医薬品を開発中。</li> <li>上記活動の一貫でAMEDの研究助成金に採択、ベンチャー企業を設立。</li> <li>獣害忌避剤による農業や食品の保護に関しては、国内および海外の企業へのライセンス供与、製品普及が進展。</li> </ul> 【背景】大阪万博開催などを控え、医薬・健康分野における学術と産業競争力を高める目的の施作を国や大阪府が推進している。問題のある臓器や細胞を外界からの介入で修復するという既存の医薬概念とは異なり、生物が進化の過程で獲得した保護能力を統合誘導する脳へ適切な感覚情報を送ることで内面的に治療する感覚創薬は革新的医薬品として注目されている。

## II. 「産業基盤の創生」プログラム総括

### 1. プログラム概要

日本の強い産業を更に強化し、あるいは新たな産業を興すことによって経済発展を促すような科学技術分野にあって、独創的、先駆的、萌芽的な研究を助成する。また地域活性化に貢献する研究を支援する助成プログラムである。

#### ■ 対象分野

自然科学全般

#### ■ 応募条件

- 国内の大学および大学院（附属機関を含む）、大学共同利用機関、高等専門学校、その他公的研究機関等に勤務し、当該機関で実質的に研究できる研究者。
- 助成期間中に日本国内に居住していること、国籍は問わない。

#### ■ 助成期間

2年間

#### ■ 助成金額

1件あたり上限2,000万円（総額）、年間約10件を採択

#### ■ 選考方法

選考委員による一次選考（書類審査）、および二次選考（面接）

#### ■ 選考基準

選考にあたり下記項目が考慮される。

- 萌芽性、先駆性：新しい技術を生み出す可能性や新しい研究領域を提案している
- 独創性： 独自の解決方法を提案しており、ブレークスルーが期待できる
- 貢献性： 研究成果が学術への高い貢献や産業のイノベーションを起こすことが期待できる※
- 計画性： 限られた期間と予算の下に目標の達成が可能な実施計画である

※ 地域の活性化、地域イノベーションに貢献する研究開発課題も重要視する

## 2. 応募・採択件数、採択率、助成金額

第1回～第10回の総計は、応募数は3814件、採択数は127件、採択率は3.3%である。  
助成金額総計は、19億1,000万円である。

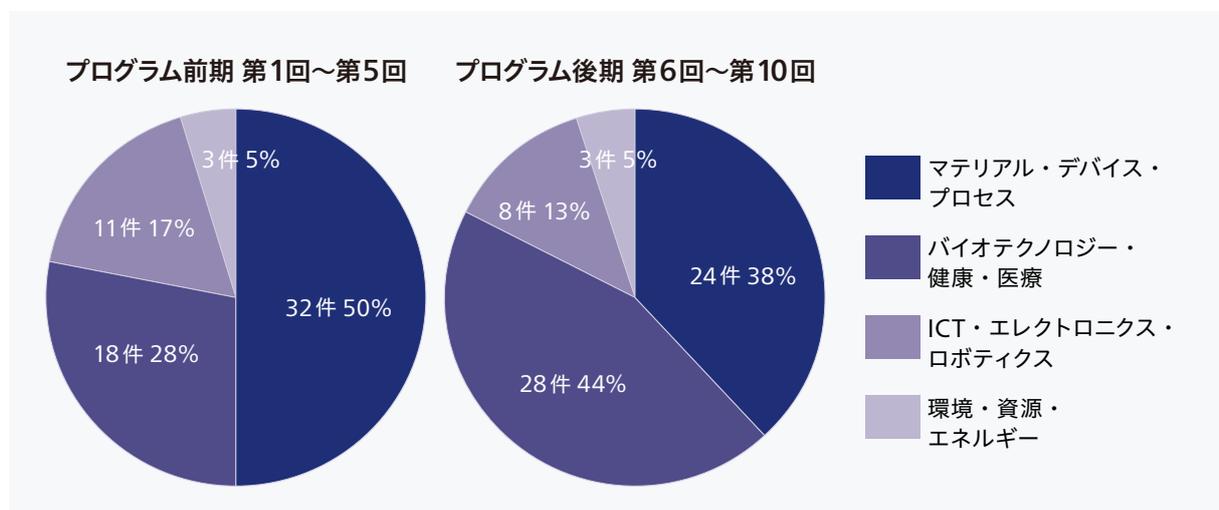
	第1回 2010年	第2回 2011年	第3回 2012年	第4回 2013年	第5回 2014年	第6回 2015年	第7回 2016年	第8回 2017年	第9回 2018年	第10回 2019年	総計
応募件数(件)	245	304	358	323	399	376	420	609	395	385	3814
採択件数(件)	13	12	13	13	13	12	13	12	14	12	127
採択率(%)	5.3%	3.9%	3.6%	4.0%	3.3%	3.2%	3.1%	2.0%	3.5%	3.1%	3.3%
助成金額(万円)	20,000	20,000	20,000	19,400	20,600	20,000	16,500	16,000	18,500	20,000	191,000

## 3. 採択実績

採択者と採択テーマは付録「採択テーマ一覧」に記す。

### 1) 技術分野

プログラム前期（第1回～第5回）にはマテリアル・デバイス・プロセスなどの技術分野が約半分を占めていたが、後期（第6回～第10回）になると、バイオテクノロジー・健康・医療の割合が増え44%ほどになっている。



※ 技術分野は採択者の申告による。(以下より選択)

マテリアル・デバイス・プロセス

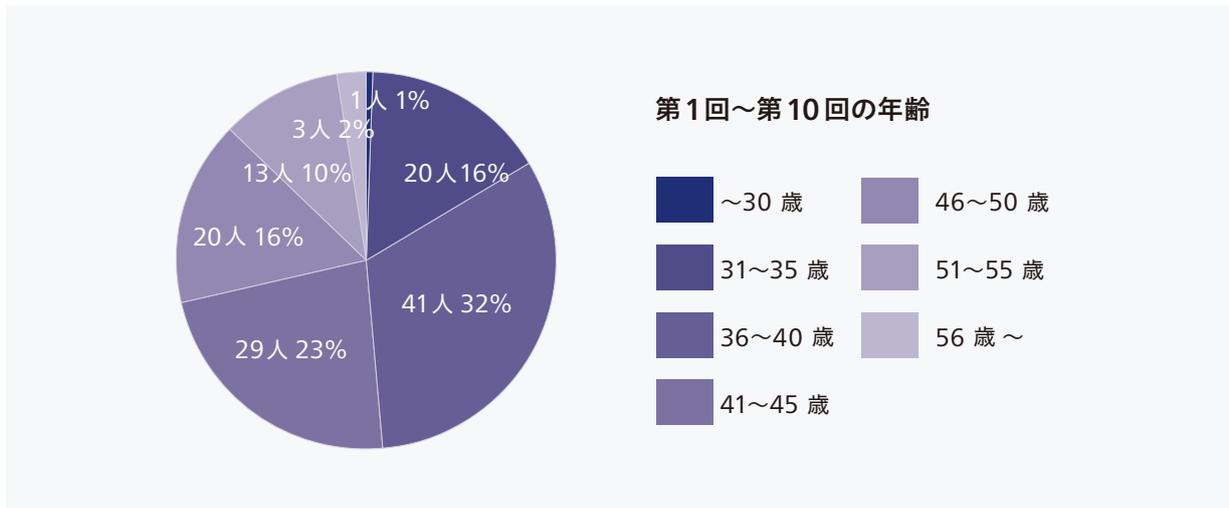
バイオテクノロジー・健康・医療

ICT・エレクトロニクス・ロボティクス

環境・資源・エネルギー

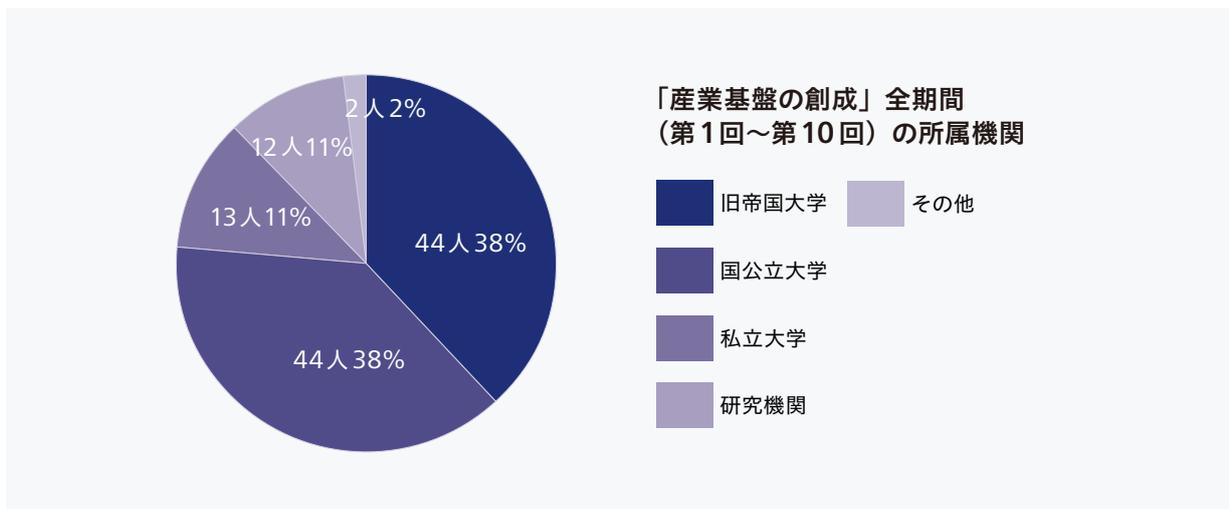
## 2) 年齢（採択時）

30 才台から 40 才代前半の研究者の比率が比較的高いが、幅広い年齢層から採択されている。



## 3) 採択者の所属機関（採択時）

採択者の所属機関は旧帝大、国公立大学がそれぞれ約 4 割、私立大学、研究機関がそれぞれ約 1 割である。



## 4. 助成終了後の発展

採択された助成研究のその後の発展を確認するため、期間終了後の研究の状況に関して、研究代表者にアンケート調査を行った。

### 調査方法

第1回～第10回の研究代表者 127 名に助成期間終了後の進展について以下のアンケートを実施。

- ① その後のあなたの研究の発展にどのような役立ちましたか？
- ② 新たな競争的資金の獲得に結び付きましたか？
- ③ 助成期間やその後の研究により生まれた特許、論文や出版物はありますか？

④ 産業界との連携研究や製品化に結びついた成果がありましたか？

調査期間

2022年3月1日～31日

回答数

95名（第1回～第10回の研究代表者127名中。回収率：約75%）

1) 学術誌掲載実績

研究助成の成果は、世の中に学術的価値の高さが認められて権威ある学術誌に多く掲載されており、採択された研究が高い学術レベルにあったと言える。

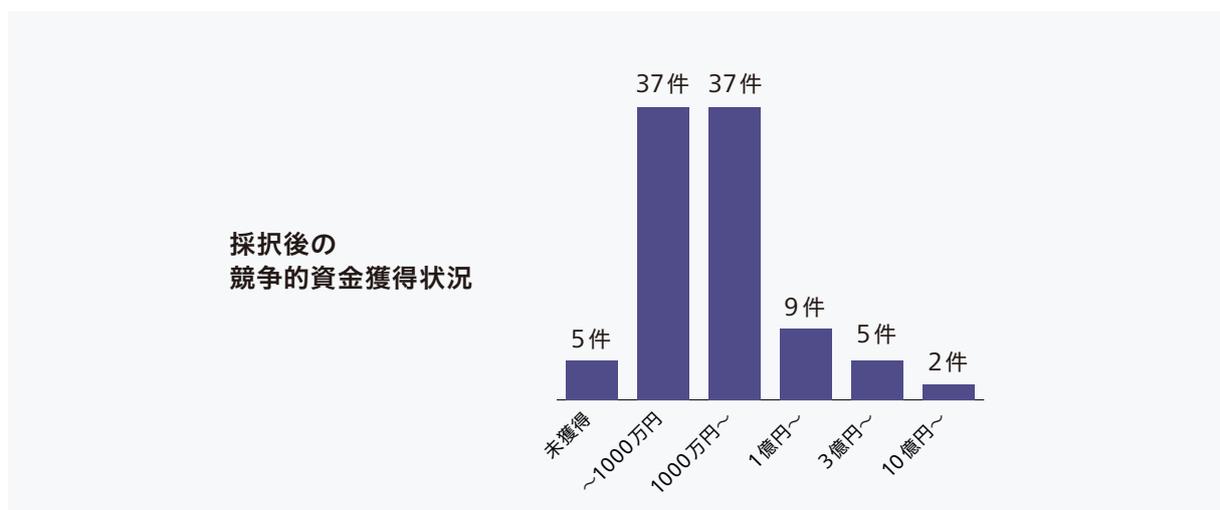
代表的な例として Impact factor10 以上の雑誌への掲載を以下に記す。

雑誌名	所属氏名(採択回)	タイトル
Nature	九州大学 松島 敏則 (9)	Stable room-temperature continuous-wave lasing in quasi-2D perovskite films (vol.585, pp.53-57 (2020))
Nature Nanotechnology	広島大学 西原 禎文 (7)	Welcome to the single-molecule electret device (vol.15, pp.966-967 (2020))
Nature Photonics	東京大学 平川 一彦 (5)	Terahertz dynamics of electron-vibron coupling in single molecules with tunable electrostatic potential (vol.12, pp.608-612 (2018))
Nature Physics	理化学研究所 山本 倫久 (6)	Generation and detection of pure valley current by electrically induced Berry curvature in bilayer graphene (vol.11, pp.1032-1036 (2015))
Nucleic Acids Research	理化学研究所 美川 務 (7)	Nonfilament-forming RecA dimer catalyzes homologous joint formation (vol.46, pp.10855-10869 (2018))
	理化学研究所 美川 務 (7)	RecA requires two molecules of Mg <sup>2+</sup> ions for its optimal strand exchange activity in vitro (vol.46, pp.2548-2559 (2018))
Physical Review X	理化学研究所 加藤 雄一郎 (5)	High efficiency dark-to-bright exciton conversion in carbon nanotubes (vol.9, Article ID 041048 (2019))
Angewandte Chemie	福岡工業大学 宮元 展義 (4)	Perovskite Nanosheet Hydrogels with Mechanochromic Structural Color (vol.133, pp.8547-8552 (2021))
	広島大学 西原 禎文 (7)	Giant Hysteretic Single-Molecule Electric Polarisation Switching above Room Temperature (vol.130, pp.13617-13620 (2018))
	広島大学 西原 禎文 (7)	Selective Ion Exchange in Supramolecular Channels in the Crystalline State (vol.131, pp.4213-4216 (2019))
	広島大学 西原 禎文 (7)	Ferroelectric Behavior of a Hexamethylenetetramine-Based Molecular Perovskite Structure (vol.58, pp.9184-9187 (2019))
	広島大学 西原 禎文 (7)	Structural Phase Transitions of a Molecular Metal Oxide (vol.132, pp.22632-22636 (2020))
	大阪公立大学 坪井 泰之 (10)	Fluorescence Colour Control in Perylene-Labeled Polymer Chains Trapped by Nanotextured Silicon (vol.61, Article ID e202117227 (2022))
Nature Communications	山形大学 栗原 正人 (1)	Nanoparticle Chemisorption Printing Technique for Conductive Silver Patterning with Submicron Resolution (vol.7, Article ID 11402 (2016))
	東京医科歯科大学 味岡 逸樹 (3)	Efficient protein incorporation and release by a jigsaw-shaped self-assembling peptide hydrogel for injured brain regeneration (vol.12, Article ID 6623 (2021))
	大阪公立大学 福田 弘和 (4)	The singularity response reveals entrainment properties of the plant circadian clock (vol.12, Article ID 864 (2021))
	京都大学 松田 一成 (4)	Considerably improved photovoltaic performance of carbon nanotube-based solar cells using metal oxide layers (vol.6, Article ID 6305 (2015))
	京都大学 松田 一成 (4)	Evidence for line width and carrier screening effects on excitonic valley relaxation in 2D semiconductors (vol.9, Article ID 2598 (2018))

雑誌名	所属 氏名(採択回)	タイトル
Nature Communications	理化学研究所 加藤 雄一郎(5)	Deterministic transfer of optical-quality carbon nanotubes for atomically defined technology (vol.12, Article ID 3138 (2021))
	北海道大学 山本 拓矢(7)	Enhanced dispersion stability of gold nanoparticles by the physisorption of cyclic poly(ethylene glycol) (vol.11, Article ID 6089 (2020))
	国立遺伝学研究所 鐘巻 将人(8)	The auxin-inducible degron 2 technology provides sharp degradation control in yeast, mammalian cells, and mice (vol.11, Article ID 5701 (2020))
Science Advances	産業技術総合研 究所 小椋 俊彦(2)	Osteoblastic lysosome plays a central role in mineralization (vol.5, Article ID eaax0672 (2019))
	大阪公立大学 福田 弘和(4)	Multicellularity enriches the entrainment of Arabidopsis circadian clock (vol.3, Article ID 1700808 (2017))
Nano Letters	東京大学 平川 一彦(5)	Inelastic Electron Transport and Ortho-Para Fluctuation of Water Molecule in H2O@C60 Single Molecule Transistors (vol.21, pp.10346-10353 (2021))
	理化学研究所 加藤 雄一郎(5)	Enhanced single photon emission from carbon nanotube dopant states coupled to silicon microcavities (vol.18, pp.3873-3878 (2018))
Proceedings of 2018 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics (SMC)	産業技術総合研 究所 林 隆介(4)	Image reconstruction from neural activity recorded from monkey inferior temporal cortex using generative adversarial networks (pp.105-109 (2018))
Proceedings of the National Academy of Sciences (PNAS)	東京大学 山本 希美子(3)	Shear stress activates mitochondrial oxidative phosphorylation by reducing plasma membrane cholesterol in vascular endothelial cells (vol.117, pp.33660-33667 (2020))
	横浜市立大学 谷本 博一(10)	Systematic mapping of cell wall mechanics in the regulation of cell morphogenesis (vol.116, pp.13833-13838 (2019))
Optica	慶應義塾大学 田邊 孝純(2)	All-precision-machining fabrication of ultrahigh-Q crystalline optical microresonators (vol.7, pp.694-701 (2020))
	徳島大学 安井 武史(5)	Scan-less confocal phase imaging based on dual-comb microscopy (vol.5, pp.634-643 (2018))

## 2) 採択後の競争的資金獲得状況

回答者 95 名のうち 90 名（回答者中約 95%）の採択者が新たな競争的資金を獲得し、研究を進展させている。そのうち、16 名（回答者中約 17%）は 1 億円以上の大型プロジェクトに発展している。



代表的な例として1億円以上の競争的資金を獲得した件を以下に記す。

氏名	所属	採択回	採択テーマ	獲得した競争的資金	
山内 悠輔	物質・材料研究機構/ University of Queensland	5	電解析出法による新規ナノポーラス白金電極の開発	JST-ERATO 山内物質空間テクトニクス	15.0億円
戸川 望	早稲田大学	3	グリーンITを実現する超低電力化フラットLSI自動設計技術の創生	内閣府SIP第2期	5.0億円
				NEDO	5.0億円
				JST-CREST	2.0億円
長崎 幸夫	筑波大学	9	放射線プロテクション機能を有するナノメディシンの開発	科学研究費:特別推進研究	約6.3億円
柳澤 琢史	大阪大学	9	Deep learningと脳ビッグデータによる想起画像推定	JST-CREST	3.0億円
				JST-ERATO	1.0億円
				JST-ムーンショット	1.0億円
松田 一成	京都大学	4	革新的光電変換機能をもつオールナノカーボン太陽電池の開発	科学研究費:基盤研究(S)	約3.8億円
山本 希美子	東京大学	3	先進分子イメージングによる血管の血流感知機構の解明	AMED-CREST	3.1億円
澤本 和延	名古屋市立大学	10	脳細胞の移動促進による再生医療技術の創出	AMED-CREST	3.0億円
味岡 逸樹	東京医科歯科大学	3	ニューラルネットワークモデル検証のための神経細胞三次元培養	神奈川県立産業技術総合研究所 有望シーズ展開事業	2.4億円
大場 雄介	北海道大学	9	高速AFMと蛍光イメージングを用いた細胞膜動態の高分解計測	AMED-CREST	約2.3億円
				科学研究費:学術変革領域研究(A)	約1.1億円

### 3) 異分野融合的研究

異分野融合的研究も多く生まれている。例を以下に挙げる。

氏名	採択回	所属	採択テーマ	融合技術
味岡 逸樹	3	東京医科歯科大学	ニューラルネットワークモデル検証のための神経細胞三次元培養	脳医学と有機材料
安 東秀	2	北陸先端科学技術大学院大学	走査ナノダイヤモンド磁気検出器プローブによる単一スピン検出	カーボン材料(ダイヤモンド)と磁気工学
安藤 和也	10	慶應義塾大学	金属酸化物スピン軌道エレクトロニクスの開拓	スピントロニクスと金属酸化物材料
内田 健一	9	物質・材料研究機構	ハイスループット熱画像計測による外場駆動熱制御材料探索の革新	スピントロニクスと熱制御
大矢 忍	9	東京大学	強磁性金属/半導体ハイブリッド量子スピントロニクスデバイス	半導体量子構造とスピントロニクス
加藤 雄一郎	5	理化学研究所	カーボンナノチューブ単一光子源	ナノチューブ材料と光量子デバイス
佐治木 弘尚	2	岐阜薬科大学	機械エネルギーで水から水素を製造する次世代エネルギーシステム	機械力学と化学反応
祖山 均	1	東北大学	流動キャビテーションによるラジカルの制御	流体物理学と光化学
田邊 孝純	2	慶應義塾大学	微小光共振器による位相制御された光周波数コム光源の開発	集積光周波数コム光源と光量子エレクトロニクス
津田 明彦	8	神戸大学	音響配向エレクトロクロミックナノファイバーの創製	音響材料と基礎化学
富永 依里子	6	広島大学	海洋光合成細菌にIII-V族半導体結晶を成長させる技術の開拓	半導体材料とバイオ
中村 龍平	1	理化学研究所	自然共生型の高効率光エネルギー変換システムの構築	バイオと電気デバイス
平川 一彦	5	東京大学	単一分子をテラヘルツ電磁波で見る技術の開拓	光半導体と量子情報
柳澤 琢史	9	大阪大学	Deep learningと脳ビッグデータによる想起画像推定	脳医学とIT(機械学習)

氏名	採択回	所属	採択テーマ	融合技術
山口 匡	6	千葉大学	非観血無侵襲の超迅速センチネルリンパ節生検システムの開発	超音波分析と高精度信号解析
山本 倫久	6	理化学研究所	グラフェンバレートロンクスデバイスの創製	スピントロニクスと超電導

#### 4) 産業化へ進展

回答者中 63 件名（回答者中約 66%）でなんらかの産業化へ向けた発展をしている。この内、29 名（回答者中約 31%）が企業との共同研究、14 件（回答者中約 15%）が製品化へと進展している。地元の企業と連携した産業化への取り組みも見られ、地域活性化へ貢献している例もみられる。

製品化まで至った例（14 件）を下記に示す。

氏名	所属	採択回	採択テーマ	製品化内容	備考
栗原 正人	山形大学	1	100°Cの壁を越える低温焼結性銀超微粒子の高効率・簡便製造と基材適合性	●パワーデバイス用の高信頼性ダイボンド接合材を製品化。	
韓 立彪	産業技術総合研究所	2	革新的有機ヘテロ原子機能材料の創製	●新規触媒プロセスで機能性リン化合物を工業生産。	
浅沼 浩之	名古屋大学	3	医療応用を目指した人工核酸の創成	●医療応用に向けた用途で非環状型人工核酸(SNA, L-aTNA)のモノマーおよびオリゴマーを市販化。	
戸川 望	早稲田大学	3	グリーンITを実現する超低電力化フラットLSI自動設計技術の創生	●ハードウェアセキュリティ野で、研究開発成果が実サービスとして展開。	
松村 和明	北陸先端科学技術大学院大学	3	両性電解質高分子を利用した高次細胞構造体の凍結保存技術の開発	●凍結保護液として試薬販売。家畜の生殖細胞の保存液としても販売予定。	
平山 朋子	京都大学	4	超低摩擦摺動メカニズム解明のための新規固液界面分析装置の開発	●低摩擦を発現し得る添加剤の製品化に貢献。	
王 碩玉	高知工科大学	4	自立高齢者生活支援のためのインテリジェント・ロボットの開発	●他大学や企業との共同研究で身近な作業ロボット開発を進め、受注生産の形で商品化。	
西村 智	自治医科大学	5	ゆらぐ生命現象の可視化デバイスの開発	●多機能、高分解能な生物顕微鏡を複数製品化	
藤田 恭久	島根大学	7	窒素ドーパ酸化亜鉛ナノ粒子塗布型紫外線LEDの高性能化	●大気中でのプロセスにより安価で作成でき、大面積化や微細化が可能な酸化亜鉛ナノ粒子塗布型LEDの実用化に進展。	地域活性化にも貢献
松田 修	九州大学	7	樹木種子の高発芽率化技術に関する研究	●充実種子選別装置を製品化 ●近赤外分光画像撮影装置を製品化	
竹井 敏	富山県立大学	8	ガス透過性金型を用いる医薬品材料のナノインプリント加工技術	●ナノインプリント・微細加工用ガス透過性金型を実用化。 ●上記成果を地域企業へ技術移管。試作品が販売開始。 ●ガス透過性金型を用いた微細加工を活用した抗菌・撥水性等の高機能プラスチックやマイクロニードル等の製剤の製品化を地域中小企業と開始。	地域活性化にも貢献
片山 佳樹	九州大学	9	がんコンパニオン診断を可能にする細胞膜抗原超高感度検出法	●高感度の細胞膜抗原検出剤として、試薬会社から商品化。	
山口 明彦	東北大学	10	視触覚センサFingerVisionに基づくAI物体操作	●共同創業した会社でフィンガー・ビジョンロボットの製品化中。	

### III. 腸内細菌ワークショップ

食と腸内細菌叢との関わりについて遺伝子解析を含め、科学的に研究するテーマが多く採択されていることから、最終的に大きな国のプロジェクトにつながり日本人の健康・長寿に貢献することを目指し、「腸内細菌叢」に関するテーマでのワークショップを開催した。

ワークショップは2017年に計4回（3月1日、6月8日、7月12日、12月1日）開催し、第6回「理想の追求」シンポジウム（2018年7月31日）で総括発表を行った。

メンバーは以下の6名である。

- 國澤純（コーディネーター）： 第9回助成研究者（医薬基盤・健康・栄養研究所）
- 辻典子： 第6回助成研究者（十文字学園女子大学）
- 都築毅： 第6回助成研究者（東北大学）
- 栗原新： 第7回助成研究者（近畿大学）
- 植松智： 第8回助成研究者（大阪公立大学 / 東京大学）
- 加藤清明： 第8回助成研究者（帯広畜産大学）
- アドバイザー： 辻真博（JST 研究開発戦略センター フェロー）  
西澤直子（石川県立大学 学長）

4回のワークショップの後、グループ内の研究グループが連携したいくつかの共同研究を開始、それぞれの得意とする技術を持ち寄った研究が進展した。さらにこれらの研究事業を一般の方に紹介するアウトリーチ活動として、キャノン財団と和食文化国民会議が共催するシンポジウムで本事業間での連携と研究について紹介した。シンポジウムの様子は食の専門誌「料理王国5月号」において紹介された。

## IV. 選考委員長講評

### 理想の追求

選考委員長 大垣 眞一郎 東京大学名誉教授  
(第4期より選考委員長)

「理想の追求」プログラムにおいては、「海」と「食」という二つのプロジェクトを遂行いたしました。「海」は、人類繁栄のさまざまな課題と関係が深く、「食」は人間の最も根源的な営みです。両プログラムとも、比較的若い研究者の先駆的で萌芽的な研究を幅広く採択でき、それらの研究がその後大きな研究に発展しました。具体的にはアンケート結果に表れています。学術面での高い貢献、異分野間の幅広い融合が生まれ、さらに、広く社会に認知され、社会的な実装にもつながる成果が生まれました。すなわち、プログラムとして大きな成果を得ることができました。

いま世界は、地球規模の気候変動、陸域から海域まで広がる新規汚染物質、新しい感染症のパンデミックなどにさらされています。さらに、さまざまな災害（地震、津波、渇水、水害、森林火災、火山噴火など）の頻発、各地の国際紛争による戦禍なども相まって見通しの悪い状況が続いています。この不確実な世界への対応のためには、科学技術、特に、分野を超えた新しい発想の科学技術が必要です。

「理想の追求」という研究助成プロジェクトは、この研究助成ならではの広がりとユニークさを持っており、「海」、「食」それぞれ5回に渡る研究助成を通して、革新的な研究領域が生まれてきたと感じています。キャノン財団の研究助成プログラムは、例えばプログラムオフィサーのような立場の者がいて研究課題と方向を指し示すものではありません。例えて言えば、白い大きなキャンパスの上に、研究者各自がそれぞれの研究構想の絵を緻密に描き、それらが重なり合い、つながり合うことによって、従来の研究領域を超えた新しい大きな絵が描き出されるようなものと言えます。「海」と「食」それぞれ18の研究テーマを採択しましたが、それらがつながり、専門分野を超えたさまざまな研究領域を形成するに至ったと理解しています。腸内細菌叢に関するテーマで研究プロジェクト群の構成に成功し、ワークショップ開催に至ったことはその具体的な例のひとつです。

「理想の追求」の「海」と「食」のプログラムは大きな成果を収めました。「理想の追求」プログラムに参加された多くの研究者の皆様に、その学術と社会への貢献に対し敬意を表します。

以上

## 産業基盤の創生

選考委員長 長田 義人 理化学研究所 客員主管研究員 北海道大学名誉教授  
(第5期より選考委員長)

「産業基盤の創生」は「新しい科学知識の獲得と新しい技術の創出によって、イノベーションを惹起し、社会・経済の発展に寄与する研究」に対して助成を行うプログラムです。2010年にスタートし、2019年までの10年間をもって一区切りして現在の「新産業を生む科学技術」に引き継がれています。「産業基盤の創生」プログラムは、あらゆる学術分野を対象としますが、異分野を融合した新しい学術領域の開拓に対しては特に考慮して選考してきました。選考審査の際求められることは、高い学術レベルにあって独創的な提案であることはもちろんですが、新しい学問を創成する先駆的、挑戦的領域であること、産業を興したり地域の活性化をもたらすことができるかといった点も考慮しました。選考に当たり、分野、地域、年齢、所属などの違いは一切考慮しておりません。

13ページの表にあるように年によって異なるものの競争率は極めて高く、10年間を通しての平均競争率は34倍にも達しました。採択されている研究者は大規模大学・研究機関だけでなく、地方の国・公・私立大学・研究所に所属する方々も数多く採択され助成されています。採択され研究者は30才台から40才代前半の若手研究者が70%を占めていますが、年齢層は幅広く分布しています。

プログラム終了を機に本年3月、研究修了者に対しアンケート調査を行いました。それによると多くの研究者が当財団研究助成終了後に、Nature, Science, Phys. Rev., PNASなどインパクトの高い著名な学術誌に多数発表して研究を一層発展・深化させていることがわかりました(15ページ参照)。事実、返信いただいた95名中90名もの研究者が助成終了後に科研費など新たな競争的資金を獲得しており、うち16名は1億円以上、2件は10億円以上の大型研究を獲得し、1000万円以上の研究費を獲得した研究者は37名にも達し、それぞれプロジェクトリーダーとして活躍していることがわかりました。このことは、採択された研究課題が独創的、先駆的であって新しい学問の潮流を生み出しているという事実だけでなく、採択された研究者がわが国の科学技術の将来を担う有能・有望な研究者として成長・発展していることを示しており、誠に喜ばしい限りです。

アンケートで分かったもう一つの事は、助成終了後でも70%もの採択課題が、社会実装と産業化を目指して研究が継続・発展し、十数件が製品開発・商品化されて新たな産業の創出を興しつつあるという事でした。これは、大学・研究機関と産業との共同研究が活発に行われ、地域活性化と産業振興に貢献していることを示しているのではないのでしょうか。

このように10年間にわたる本プログラムは顕著な学術成果を挙げただけでなく、数多くの有能な若手研究者を発掘・育成して日本の将来の科学技術の発展に重要な寄与をしていると言う事ができるかと思えます。先駆的な研究とは現在の科学と技術を乗り越えてはじめて実現するものです。キヤノン財団の助成を受けた研究者の一人一人が今後もこの気持ちを失うことなくわが国の科学技術を先導してイノベーションを起こし、より豊かな社会の実現に貢献することを期待してやみません。

以上

## あとがき

本報告書を通して、キャノン財団第一期の二つの研究助成プログラム「理想の追求」「産業基盤の創生」を振り返りました。

採択者・採択テーマの分析から、幅広い技術分野・年齢層・機関（大学・研究機関）からの研究者が採択されていることが分かります。これは、過去の実績や既存の技術分野に捕らわれずに、新しい学術を生み、社会にイノベーションを起こす可能性のある先駆的・萌芽的・融合的な研究に挑戦する研究者を支援できたという事を表しています。特にまだ実績の少ない若い研究者や地方大学の研究者からも多く採択し、多様性のある研究助成を行うことができたと考えています。

また総括にあたり、助成研究終了後にどのような発展をしたか、その成果に関して調査を行いました。その結果、多くの研究が権威ある学術誌へ論文が掲載され、高い学術レベルにあることが世の中に認められている事、また、国や地域の施策への貢献、産業化に至った例も多く、社会への貢献という点でも成果を挙げつつあることが分かりました。まだ助成期間を終了したばかりの研究も多く、今後さらに多くの研究が大きく発展していく事と思います。

当財団では、研究者自身の独創性に基づく研究、長期にわたる学問の進歩を生むような研究への支援を目指しています。助成期間3年間での成果は一つの通過点と捉えており、その後、多種多様に大きく高く研究が飛躍し、世の中を変えるような大きな成果につながる事を期待しています。今回の調査結果により、まさにその期待通りの成果につながっている事が分かり、大変喜ばしく感じるとともに、研究者の皆様の高い課題に向かって挑戦する姿に敬意を表する次第です。

さて、2020年からは第二期として、「善き未来をひらく科学技術」「新産業を生む科学技術」の二つの研究助成プログラムをスタートさせました。感染症のパンデミック、国際紛争、気候変動など世界が混迷を極める中、理想的な未来社会を創るために、科学の発展とともに多様化・複雑化する社会的課題に向き合うことが求められ、研究者の知の力に期待が高まっています。新しい二つのプログラムでは、前プログラムの「科学技術を発展させ、新しい価値を生み出す研究を支援する」という精神はそのままに、更に「人類にとっての理想の社会とは何か」「様々な困難を克服するための産業を興すために何をすべきか」を研究者自身に問い、その構想を実現するための独創性のある先駆的な提案を求めています。本助成が、予見される新たな課題を突破し、新しい未来社会の可能性をひろげる研究者への支援となることを願っています。

一般財団法人 キャノン財団